名古屋大学附属図書館所蔵『鈴木楯夫文庫』について

名古屋大学附属図書館　中井えり子

鈴木楯夫は、名古屋地方における最も古い社会主義者として知られる。自ら片山潜を恩師と言い、幸徳秋水派と別れた片山の片腕であったとも言える明治期と、右派社会民主主義者として活動した大正末から昭和期とで、彼の思想的立場は変化したものの、名古屋地方で大正中期から昭和10年代にわたって一貫して社会運動分野の報道・評論活動を続けたことは注目に値する。

名古屋大学附属図書館所蔵（準貴重書室）のこの鈴木楯夫文庫には、楯夫が所蔵した社会主義関係の図書38点、新聞・雑誌20点が含まれるが、彼の社会主義者としての活動を示す資料として、自らが編輯兼発行人となり、記者となって出版した新聞・雑誌９タイトル、やはり生涯をかけて行った演説会活動の跡を物語る演説会関係の資料や「私の文章」と名づけられた鈴木楯夫が書いた記事150点余りの切り抜き集が興味深い。

その他に写真や楯夫が関わった裁判記録の写し、初期社会主義者として知られる片山潜や堺利彦からの書簡などがある。しかし本文庫は、図書館側の記録としては図書原簿により昭和36年３月に、ある古書店を通じて入手したことが知られるのみである。故鼓肇雄元名古屋大学経済学部教授が「労働運動史研究」28号（1961）で同文庫について言及しているものの「…明治以来名古屋の旧い社会運動家であった故鈴木楯夫の所蔵していた資料が、遺族の御厚意と、前名古屋大学附属図書館長・信夫清三郎教授の尽力で、同図書館に鈴木楯夫文庫として永く所蔵されることになった…」という以上にはわかっていない。

同文庫の図書は受入当時に目録カードが作成されているが、その他の資料は整理された記録がない。筆者は昭和58年頃和書目録担当者としてその整理を依頼され、簡単な目録を作成したものの、職場の異動もあり詳細な整理は中断したままであった。その後法学部図書室在職中の平成５年に当時法学部教授であった山田公平先生のご助言もあり、全資料をデータベース化（Macintosh版　File Maker Pro３）する作業を再開した。このたびほぼその作業が終了したため、資料の一部を紹介する次第である。紙面の制約もあるので、鈴木楯夫の経歴を裏づける資料のみを彼の経歴と関連

づけながら紹介する（斎藤勇著「名古屋地方労働運動史：明治・大正篇」風媒社　1969；「日本社会運動人名辞典」青木書店　1979；伊藤英一著「評伝・鈴木楯夫」ブックショップ「マイタウン」1996. 12発行予定を参照）。

鈴木楯夫は明治13年１月３日（1880）に現在の愛知県海部郡七宝町に誕生。小学校を３年でやめて以来、21歳の徴兵検査までに14の職業につく。21歳のとき津島署の巡査（１）となるが１年ほどでやめ、上京して法律の勉強を始めるが病気のため帰郷する（２）。明治39年には日本社会党の党員となる。明治40年に上京して、西川光二郎（３）の紹介で片山潜（４）らが発刊した「社会新聞」の発行に加わる。明治41年に片山潜と東海道遊説の旅に出る（５）。明治43年には大逆事件のまきぞえで、11月に不敬罪（６）に問われ、大正元年まで入獄する。大正３年、石田とめと結婚。大正８年以降、自ら編輯兼発行人となって新聞や雑誌を発行するなど労農運動・普選運動の評論活動を行う（７）が、大正９年12月に不穏文書事件（８）で翌年３月まで入獄する。大正14年には名古屋地方の無産政党準備団体として結成された無産政党期成同盟の常任幹事（書記兼任）、昭和２年には地方無産政党労農民衆党の書記長、昭和３年には労農民衆党が合流した全国的な無産政党右派の社会民衆党愛知県第一支部長となり、昭和４年には普選後はじめての名古屋市会議員選挙に社会民衆党公認で初当選し、昭和８年10月までの１期市会議員を務める。引き続き社会大衆党から立候補するがこれには落選。昭和21年１月15日（1946）に67歳で没する。

上記中（１）から（８）の資料は以下のとおりである。

（１）「明治35年11月12日　津島署在勤松本彦兵衛氏と楯夫」の説明がある写真

（２）「家庭新聞」51号（昭和13. 12. 1）にこのあたりのことが松山生「彼の仕事」という記事の中で書かれている。

（３）片山潜と西川光二郎が明治41年に分離した真相を鈴木楯夫が書くべく、片山潜や石丸蔵次郎とやりとりした書簡がある。大正８年８月頃の片山から楯夫に宛てた書簡及び同年10月31日の消印がある石丸から楯夫宛はがきが、鼓肇雄「片山潜の鈴木楯夫宛の手紙」（労働運動史研究32号　1962）に掲載されている。

（４）上記（３）のほかに、ニューヨークの片山潜から鈴木楯夫に宛てた大正９年４月頃の手紙、同年６月27日の消印のある手紙および８月24日付け手紙や、ソビエトからの1931年６月11日付けのはがきがある。

（５）鈴木楯夫は明治39年頃から演説活動を行っているらしいが、本文庫には大正８年頃からの演説会に関わる次のような資料がある。

「演説日誌」

昭和２年７月から８年９月にかけて、楯夫が演説した演説会260余りの日時、会場、聴衆の数、演題、所要時間および主催者を罫紙に自ら記したもの１冊。表紙裏には、昭和２年に胃潰瘍で死に瀕したことがきっかけで、今後一生を通じて何回演壇に立ち得るかを記録したいという意味の書きつけがある。

「演説会チラシ集」

現在のところ開催年月の不明なものも多いが大正８年頃から昭和８年頃までに開催された演説会のチラシ99点で、そのうち40点余に弁士として鈴木楯夫の名があがっている。

「演説会のポスター」

昭和２年頃から８年までのもの11点。時局批判や生活窮乏打破の演説会が大半であるが、市会報告や全日本農民組合創立大会などのポスターも含まれる。

「演説の原稿」

昭和２～３年頃の楯夫の演説原稿およびメモ30点。安部磯雄の演説の大要を「名士演説参考」と題して楯夫がメモしたもの。

（６）不敬罪判決文（明治43年11月４日付け）の謄本、入獄中に義父後藤徳二郎に宛てた書簡３通および大逆事件の際に於ける宣誓書の控。

（７）鈴木楯夫が発行した新聞・雑誌（発行年代順）

「労働時報」労働時報社　１（大正８．８．18）

「社会新聞」［名古屋労働通信社］１－11（大正９．１．20－12.11）

６～８号は発売禁止となる。後述の不穏文書事件のため11号で廃刊。

「社会評論」社会評論社　１－３（大正10．９－11．１）２号は発売禁止となり残部は押収。

「社会通信」社会通信社　６，15，17－32，34－50，54，56，79－80，85－86，88，90－

94, 96, 特別号, 192, 192号外（大正11.4.1－14.1.21）
88号より副題に「社会評論雑誌」がつく。特別号は発売禁止となる。

「新社会」社会通信社　195, 197－215（大正14.4.1－昭和2.1.28）

「社会通信」社会通信社　216－222（昭和2.2.15－7.17）

「民衆新聞」社会通信社　1－5（昭和2.9.21－12.5）

「名古屋民衆新聞」社会通信社　1－6（昭和3.6.1－11.28）

「社会通信」社会通信社　102, 184（昭和7.5.4－11.18), 492（昭和10.5.29）

「名古屋大衆新聞」名古屋大衆新聞社　562輯（昭和12.3.1）［3面以降欠］

「市民新聞」市民新聞社　1（昭和12.12.1), 1－5（昭和13.4.1－昭和13.10.1）［1の3～4面欠損］

「家庭新聞」家庭新聞社　51－52（昭和13.12.1－14.1.1）

「社会通信」社会通信社　53－58（昭和14.2.20－7.15）

以上のうち「社会通信」は刊期の異なるものが、混在していると思われる。今後の調査課題である。

（8）大正9年12月28日発行の大阪毎日新聞（文庫にはこれを含め、他紙の不穏文書事件に関する切り抜きがある）によると、全国各地の軍隊や警察署その他に不穏文書を発送したとの嫌疑をかけられたもので、大正10年3月22日付けで名古屋控訴院検事局より鈴木楯夫に宛てた免訴放免の「詐欺被告事件予審終結決定」通知がある。さらに楯夫の入獄を見舞う堺利彦からのはがき（大正9年12月27日付け）もある。

以上、鈴木楯夫の資料を紹介したが、詳細なものではなく、また言及できなかったものも多い。さらに全資料の年代特定等については現在調査中でもあり、調査が済み次第、全資料の目録を発表するつもりである。昭和前半までの社会運動史研究および地方史研究に役立てば幸いである。文庫整理にあたっては、名古屋大学名誉教授山田公平先生（法学博士)、前愛知大学教授斎藤勇先生及び前守山高校教諭伊藤英一先生にご教示いただいた。末尾ながら厚く御礼申し上げる。